

もくじ

地漉紙問屋 佐々木庄兵衛と日本画家 高屋肖哲… P1 はい、文化財係です(番外編)
 通水百周年 荒川放水路建設と足立… P3 お化け煙突60年⑤煙突②… P4

足立史談

第677号

2024年7月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集部

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

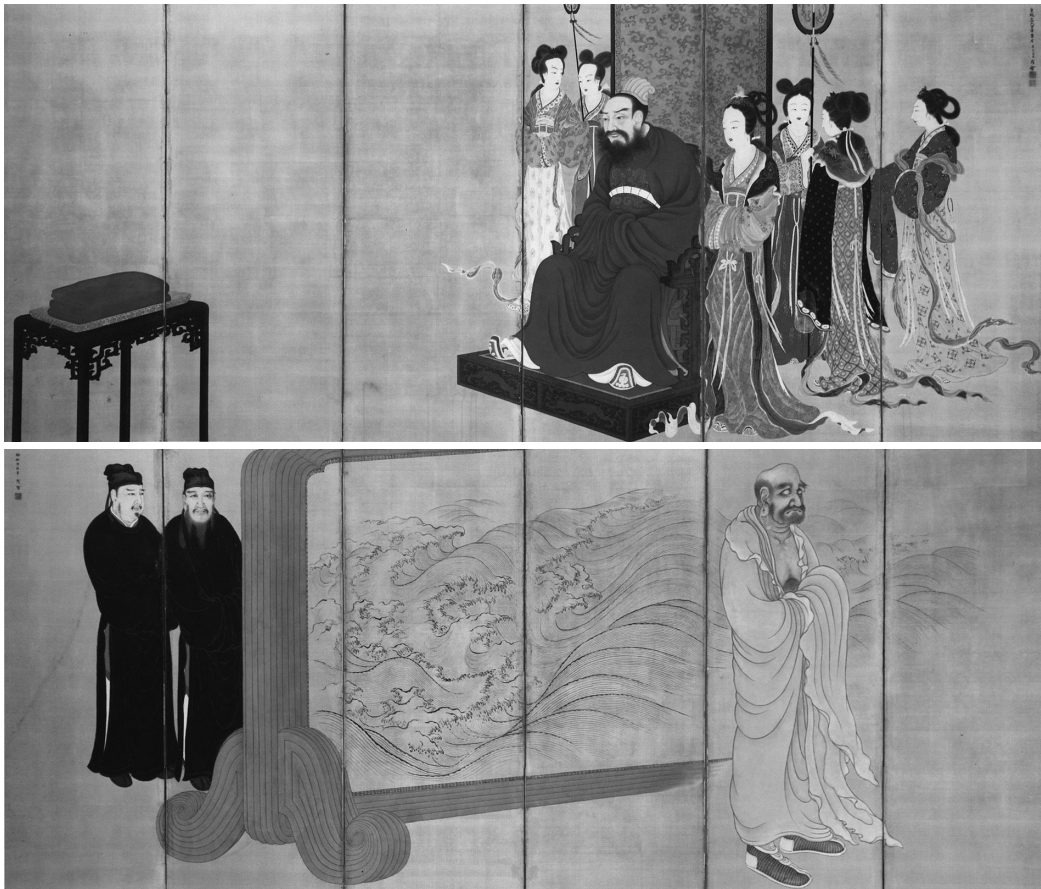


図1 高屋肖哲「武帝達磨問答図屏風」絹本金地着色 昭和15年(1940) 浅草寺蔵

千住の商家と画家の交流 地漉紙問屋 佐々木庄兵衛と日本画家 高屋肖哲 小林 優

江戸時代以来、千住・足立地域では多くの芸術家が活動してきました。明治画壇の大家、狩野芳崖の門人である高屋肖哲(たかや しやうてつ、一八六六―一九四五)もその一人です。この肖哲を調査するきっかけとなったのが、現在、浅草寺に所蔵されている肖哲筆「武帝達磨問答図屏風」(図1)が、千住の佐々木庄兵衛氏の依頼によって制作されたという記録が確認されたことでした。

郷土博物館では、肖哲の事績と共に佐々木庄兵衛氏の追跡も行い、近年の調査により、庄兵衛氏が千住の地漉紙問屋の主人であることが特定されたのです。今回はその調査成果を踏まえ、肖哲と庄兵衛氏の繋がりと、「武帝達磨問答図屏風」についてご紹介します。

■高屋肖哲と「丸屋」佐々木庄兵衛
 肖哲の概略については『足立史談』第六五九号で紹介していますが、改めて基本情報を確認すると、明治二十六年(一八九三)に一期生として東京美術学校(現東京藝術大学)を卒業後、石川県工業学校教諭、東京美術学校助教を勤め、やがて画壇から離れて仏画研究に没頭するようになります。そして、大正前半より現在の千住四丁目十九番地付近に居住し、在地の画家として活動しました。

この肖哲と交流し、「武帝達磨問答図屏風」の依頼者となったのが、千住四丁目で江戸時代中後期より続く地漉紙問屋の主人、佐々木庄兵衛氏です。

地漉紙問屋佐々木家は屋号を「丸屋」と言い、当主は「庄兵衛」を名乗っていました。寛政三年(一七九一)に幕府より公認された千住の地漉紙問屋の株仲間「元方問屋」の一軒でもある有力問屋であり、天保十四年(一八四三)に幕命による地漉紙の緊急生産を成し遂げたことを記念して建立された「紙すき碑」(現在は千住大川町の氷川神社所在)に刻まれた株仲間二十一軒にも名を連ねています。明治・大正を通じて和紙問屋業を続けて昭和三年(一九二八)に印刷部を設立し、後に印刷業へ業種を変えて、現在も株式会社丸庄として継続しています。

肖哲と交流したのは、七代目当主の丸屋庄兵衛氏です。肖哲への屏風制作依頼が行われたのは、大正八年（一九一九）のことで、このことは肖哲の手記『雑事抄録』（金沢美術工芸大学蔵）第三十五巻中「金屏風揮毫記事文」の項で、「大正八年千住町佐々木庄兵衛氏の知偶^{マコ}を得て金屏風の揮毫（きさい）を委嘱せらる佐々木氏文雅の趣味あり」と記述されています。

『雑事抄録』の記述や千住で確認された作品から、肖哲は特に千住三（五）丁目の人々と親しく付き合い、時に掛け軸などの依頼を請けていたと見られます。庄兵衛氏もまたごく近所の家として肖哲と交流を持ち、屏風制作の依頼へ繋がったものと考えられます。

■「武帝達磨問答図屏風」制作の顛末

「武帝達磨問答図屏風」は、絹本金地に極彩色で描かれた六曲一双屏風です。インドより中国に渡った達磨と六世紀中国南北朝時代の南朝・梁の武帝が問答を交わすという、禅の問答・問題集『碧巖録』に収録された一場面を画題として、右隻に武帝、左隻に達磨を配しています。左右の署名にはそれぞれ「皇紀二千六百年皐月」（右隻）、「昭和庚辰年」（左隻）の年紀があり、大正八年に依頼を受けてから二十一年後の昭和十五年（一九四〇）に完成したことがわかります。

完成まで長い歳月を要した本屏風制作を巡る顛末が、「金屏風揮毫記事

文」に次のように記されています。

「抑々金屏風の本彩色に粹を竭せしは、力作を遺さんが爲なり。予は曩に宗教美術の研究に没頭して以来未だ其諸に就かず、爰に大正癸亥の大震災に遭遇し、會々摸本の依頼を受けて高野山に登り、傍らに密教美術の典型を究むること数年、退て淡路由良政岡家に奇寓して研鑽を遂げ、續て九州地方に遊びて不圖も長年月の滞在を重ねて、先年歸東せり。是に於て漸く宗教美術研究の目的を達成し、又時機至りて金屏風彩画の完成をも爲し得たるものは、偏へに宗教の因縁淺からざる給ものと謂ふべし。尚本年は恰も皇紀二千六百年の佳辰に當り、祝賀を表すると同時に、佐々木氏の心意を併記して以て後の觀者に傳ふる所以也」

（句読点は筆者）

宗教美術の研究に没頭して屏風の制作に手を着けられずにいたが、関東大震災に罹災した時、模本の仕事を受けて高野山に滞在する機会を得、数年間、仏教美術の典型を突き詰めることができた。さらに各地を遊歴しながらの研鑽を経て東京へ戻り、満を持して皇紀二千六百年を迎える昭和十五年に屏風の完成を見たということです。

冒頭で「力作を遺さんが爲」と述べるように、本屏風の制作は肖哲にとって渾身の一作を作り上げることが意図

したものであり、その完成は「漸く宗教美術研究の目的を達成し、又時機至りて金屏風彩画の完成をも爲したる」とあるように、自身の仏教美術研究の集大成となるものでした。本作については椎野晃史氏（泉屋博古館東京学芸員）が詳細な検証（椎野晃史「浅草寺蔵高屋肖哲筆「武帝達磨問答図」について」、『國華』第一四五九号（國華社、二〇一七年））を行

っています。肖哲の綿密な考証、図中に込められた工夫などを指摘して、本作を肖哲晩年の代表作と位置付けています。

この屏風はその後、戦中・戦後のどこかの段階で佐々木家から離れたと見え、昭和三十年（一九五五）に、庄兵衛氏とは異なる人物から浅草寺へと奉納されたことがわかっています。以来、同寺の什宝として、今日まで保管され続けてきたのです。

本年四月、庄兵衛氏の調査の過程で、佐々木家九代目当主、佐々木正一氏より、家伝の資料を郷土博物館にご寄贈頂きました。その中には、七代目当主庄兵衛氏の代、明治四十五年（大正元一九一二）に詠えられた、同時代の日本画家の直筆画の描かれた袱紗（図2）も確認され、こうした資料からも、肖哲が「文雅の趣味あり」と評した庄

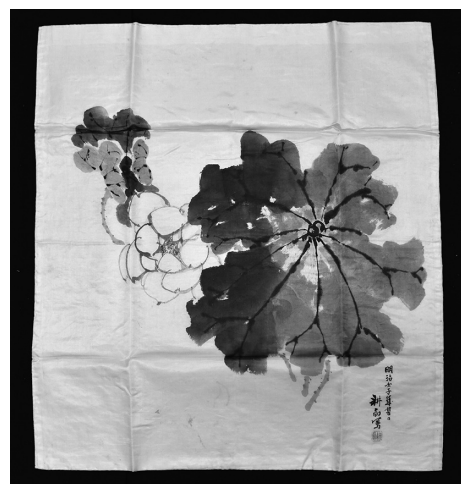
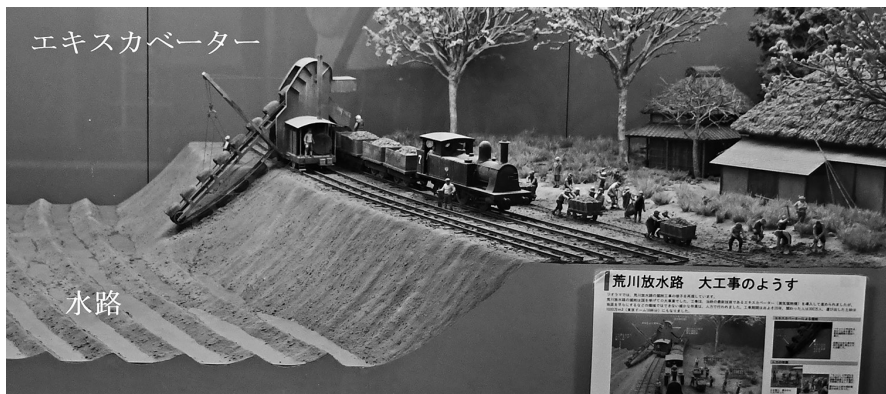


図2 五島耕畝 袱紗「蓮図」
当館蔵（佐々木家資料）

兵衛氏の嗜好が垣間見えます。肖哲への屏風の依頼は、そのような庄兵衛氏の文雅趣味と、千住四丁目を舞台とする交友関係が背景となつて成されたものであり、「武帝達磨問答図屏風」は、大正・昭和の千住在地の画家の活動と、地域の人との交友の結実を見せるものとして、地域的美術文化史上の注目すべき一作と言えるのです。

付記 佐々木庄兵衛氏については相川謹之助氏（足立史談会会員）に情報提供を頂き、佐々木家の調査では佐々木正一氏に、屏風の調査では藤元裕二氏（浅草寺教化部）にご協力を頂きました。ここに記して御礼申し上げます。
※「武帝達磨問答図屏風」の作品名は『浅草寺什宝目録 第二巻絵画編』（金龍山浅草寺、二〇二〇年）の表記に準じています。

（当館学芸員）



荒川放水路建設のジオラマ

はい、文化財係ですー番外編ー
荒川放水路通水百周年
荒川放水路建設と足立

本年十月十二日は、荒川放水路通水百周年という記念すべき日です。これに合わせて関係自治体等で様々なイベントが予定されています。そこで今回は、足立区と荒川放水路の関係についてみてみましょう(※1)。

【明治四十三年の関東大水害】明治四十三年(一九一〇)八月、梅雨前線と二つの台風が重なり、関東は大

水害に見舞われました。南足立郡(現足立区域)の被害も甚大で、死亡三名、全壊七五戸、半壊二一六戸、

破損五八四二戸、床上・床下浸水一、七六八戸に及びました。南足立郡は、当時の総戸数の一〇〇%が被害にあっています。総戸数〇被害戸数というのは唯一の事例で、足立区域がいかに水害の影響を受けやすいかがわかります。

直接的な水害による死者は三名でしたが、水害発生からおおよそ半年の間に罹災患者治療所(千住四丁目)に収容された一七一名の内、二八名が亡くなりました。亡くなった人の多くは、食糧難による栄養不足や衛生環境の悪化による伝染病などの影響によるものとみられます。こうした状況を憂えた洪沢栄一をはじめとする有志が東京水災善後会を結成し、多額の寄付をして大量の消毒薬を被災地に配布し、衛生状態の向上を図っています。水害の直接的な被害もそうですが、こうした感染症の被害も水害を考えるうえで忘れてはなりません。

【放水路建設】明治四十三年の関東大水害を受け、周辺地域から荒川改修の要望が高まり、政府は荒川放水路の建設を決定します。荒川放水路

の建設は、内務省の技師である青山士(あおやま あきら)が中心となっていました。

大正元年(一九一二)から用地買収が開始され、大正二年二月に工事着手します。

写真はかつて博物館で展示されていた放水路建設の様子を再現したジオラマです。まず、人力で川岸を平らにし、エキスカベーターという蒸気式掘削機や機関車のレールを敷きます。エキスカベーターは、当時最新の掘削機で、水路を掘り進めていきました。掘った土は機関車やトロツコなどで運ばれ、堤防に利用されました。

放水路建設は、延べ三〇万もの人がかわったといわれ、国をあげて行われた大事業でした。百年前の大正十三年に行われた通水式には、総理大臣も出席しています。

【放水路建設への反対】放水路の流路はさまざまな案がありましたが、最終的に現在の流路となり、放水路の完成によって千住地域と宮城小台地域が、河川に挟まれた状態となりました。

この流路をめぐって、明治四十四年五月十五日付で千住町長が内務省へ提出した陳情書には、「千住は水害のために滅びるのではなく、治水対策のために滅びる」と書いてあるといえます(※2)。放水路によって水運・陸運が分断され、商業が衰退してしまうため、千住が滅びるというのです。当時、荒川沿いの鹿浜、新

田・宮城周辺には、水運の利便性から、多数の煉瓦工場がありました。しかし、放水路の建設によってその水運が分断され、閉鎖された煉瓦工場もありました。放水路の建設は、地域の産業構造も変化させたのです。こうした点を当時の千住町長は懸念したのでしょう。

【放水路建設と文化財】放水路の建設は、文化財にも影響を与えました。小台二丁目の路傍にある「小台の七庚申」(足立区登録有形民俗文化財)は、元は放水路の用地内の各地域にあり、本来なら水底に沈むはずの庚申塔でしたが、これを憂えた下川亀蔵氏が一か所に集めて安置し現在まで伝えられています。

以前ご紹介した元宿神社(千住元町三三―四)の「感旧碑」(足立区登録有形文化財)は、鈴木與吉氏が用地買収にあたって、先祖伝来の土地を去ることになった顛末を大正五年に刻んだ石碑です。「公」のために「故地」を去ることの葛藤が伝わる名文で、用地買収を受けた人々の気持ちを現在に伝えています。

空前の大工事と、多くの人々の葛藤の末に生まれた放水路は、現在も水害の惨禍から人々を守り続けています

※1 本誌六二三号「荒川放水路の建設と感旧碑」も参照。

※2 絹田幸恵「新版 荒川放水路物語」新草出版、一九九二年

(文化財係学芸員)

お化け煙突60年⑮

煙突②
格和宏典



煙突滑り台 旧元宿小学校
昭和40年(1965)～平成19年(2007)



煙突モニュメント
帝京科学大学千住キャンパス
平成22年(2010)4月から

平成二十六年九月、足立区立郷土博物館主催、「お化け煙突のせかい」と題した講演会があり、筆者が講師を務めました。その時の寄せ書きに、元宿小学校の生徒だったという方が、「学校の窓から煙突撤去の様子を見ていました。切り取られた鉄板が吊り下げられてくると、日光があたってキラキラとまぶしく輝いていたのを覚えています。」と書いていました。

ミ焼却用に転用できないかとの案も出されたようですが、これといった決定打もなく、老朽化した設備を維持することは困難であるとの結論に至り、廃止後撤去が決まったと聞いています。

昭和三十九年二月二十九日、通商産業省(現・経済産業省)の廃止認可があり、発電所の撤去が始まり、煙突は十一月、完全にその姿を消し去り、私たちの脳裏に焼き付くのみになるかと思われましたが、発電所の隣にあった元宿小学校PTAの皆さんが立ち上がり、煙突の一部を譲り受け、校庭に滑り台として復

活させました。しかし、小学校が統廃合となり、煙突滑り台の存続が危ぶまれましたが、跡地に誘致された帝京科学大学によってモニュメントとして復活しました。

隅田川左岸、大学の敷地内にあるモニュメントは、足立区の新しい名所として訪れた人々を迎え入れています。

■音まちイベントとお化け煙突

「アートアクセスあだち音まち縁」(通称「音まち」)は、東京藝術大学の学生や関係するアーティストなどで構成され、足立区と協働して「音楽を通じた千住の魅力づくり」を行っています。アートを通じた新たなコミュニケーション「縁」を生み出すことをめざす市民参加の「アートプロジェクト」で、足立区千住地域を中心に、市民とアーティストが協働して「音」をテーマにした「まちなかライブ、ワークショップ、トークイベント」などを展開しています。

け煙突の数奇な運命に着目し、様々な人びとに出合いながら、「記憶の遠近法」として「お化け煙突」に由来する「輪廻」を生み出す作品を仕上げました。久保氏は、煙突の鉄粉を譲り受け、陶芸家の瀬川辰馬氏が、「鉄粉入りお化け煙突」を焼き上げ、作品の流れとして重要な位置づけを果たしました。

平成二十八年一月二十三日、千住四丁目の「たこテラス」において作品展を開催しましたが、前日の二十二日、オープニングレセプションが開かれ、久保氏の作品説明のあと、久保氏のお母さまの出身地であるフランス・ボルドー産のワインを「鉄粉入りお化け煙突」に注ぎ込み、筆者に「乾杯の発声を」と声をかけてくれました。一瞬「ドキッ」としましたが、乾杯発声のあと、二度と抱きしめることがないと思っていた「お化け煙突」に熱き口づけをすることができました。久保氏の粋な計らいに感謝した次第です。

つづく

*音まちのイベントと、お化け煙突型陶器作品については、「2015・アートアクセスあだち 音まち千住の縁 千住、縁レジデンス・【記録】久保ガエタン「記憶の遠近法」にて詳しくご覧になれます。

<https://aaa-senju.com/2015/>

久保氏は、解体されたお化

(元千住火力発電所職員)